

# 日本ピューリタニズム学会

## 2020年度 定例研究会

開催日時：2021年4月10日（土）15:30 - 17:30

場所：Zoomによる遠隔開催

発表者：山口京一郎（国際基督教大学・キリスト教と文化研究所研究員）

タイトル：「セネカ『自然研究』6巻に見る地震災害に対する古代自然学のアプローチ」

司会：竹澤祐丈（京都大学）

ローマ時代1世紀の政治家・哲学者・文筆家であるセネカによる『自然研究』第6巻は自然学的立場から地震のメカニズムを考察する一書である。古代地中海世界自然学における地震の原因探求はタレス（前6世紀）に始まり、初期自然哲学者たちやアリストテレス以降の哲学諸派の探求対象であり続けた。本書は、（ほぼ全体が現存している数少ない例であるという事情もあり）古代の地震研究の集大成ともいえる。その主たる部分（地震原因論部分、6-31章）は、アリストテレス『気象論』の地震原因論部分（365a ff.）と共通して、先行する諸説の紹介と評価をした後に自説を展開する構成になっており、地震論のスタンダードな構成を踏襲していることをうかがわせる。他方、本書独自の特徴は、それが実際の地震災害への応答になっている点である。後62年2月5日に発生したカンパニア地震は、ポンペイに壊滅的被害をもたらし、ネアポリスなど周辺都市にも被害が及んだ。地震発生後1-2年ほどのうちに執筆されたと考えられる本書は、枠にあたる1-5章と32章で地震災害に脅える人々への応答をおこなっている。

本報告では、セネカによる地震災害への応答が、枠部分におけるストア派的世界観・死生観による説得に留まらず、地震原因論部分にも及んでいることを指摘したい。すなわち枠部分においてセネカは人々の脅えを取り除くことが必要だと指摘し、特定の原因による死を特別視すべきではないことと、死そのものを恐れるべきではないことを説得する。同時に枠部分では人々の脅えの主たる原因のひとつが地震により発生する地割れへ呑まれるなどして地下へと落下することであるとされ、また原因を知らないことや現象に慣れていないことが恐怖をもたらすとされる。したがって、地震原因論部分での地下構造への多数の言及は、原因探求それ自体を目的としているのみならず、読者の原因理解と慣れを促し、地震と地下世界への恐怖の軽減を兼ねていると考えられる。そのように解釈したとき、枠部分に留まらず本書全体が、セネカによる震災への応答として理解されるであろう。